

3) バルサルバ洞瘤による大動脈弁閉鎖不全が疑われた1例

石黒 淳司・小玉 誠 (新潟こばり病院)
土谷 厚・矢沢 良光 (循環器内科)

4) Intimal flap が二尖弁様の動きを示した DeBaKey I 型マルファン症候群の1例

福島 健泰・小田 弘隆 (新潟市民病院)
津田 隆志・佐藤 広則 (循環器科)
樋熊 紀雄
矢沢 正知 (同 第二外科)

5) 心腔内に穿通する心膜石灰化の2例

高野 論・大滝 英二 (新潟県立中央病院)
(循環器内科)

6) 断層心エコー図短軸像による心機能の標価 —Straight-back 症候群と Rigid spine 症候群を比較して—

埴 晴雄・松原 琢 (新潟大学)
和泉 徹・柴田 昭 (第一内科)
林 千治 (同 公衆衛生学)
山崎 元義 (同 神経内科)

7) 心房細動症例における僧帽弁逆流の検討 —経食道心エコー法を用いて—

土田 兼史・鎌田 滋夫 (秋田赤十字病院)
朱 敏秀 (内科)

特 別 講 演

「経食道カラードップラー法の応用」

埼玉医科大学第一外科教授

尾 本 良 三 先生

第48回新潟消化器病研究会

日 時 昭和63年7月9日(土)
午後1時30分より

会 場 新潟ワシントンホテル

一 般 演 題

1) 当科における内視鏡的な早期胃癌治療の現況

柳澤 善計・滝沢 英昭
植木 淳一・秋山 修宏 (新潟大学)
阿部 実・富樫 満 (第三内科)
八木 一芳・斎藤 興信
成澤林太郎・上村 朝輝

1986年3月より1988年4月まで、strip biopsy, LASER,あるいは両者の併用により内視鏡治療を行なった。病変はII a 10病変, II a + II c 3病変, II c 2病変でいずれもm癌と考えられた。治療方法として、strip biopsyを5病変に、LASERを7病変に、両者の併用を3病変に施行した。最短1カ月、最長25カ月の経過観察中、LASER治療群の1例に癌の再燃、1例に他部位に癌が認められた。治療方法の選択、治療効果の判定および予後に関する評価は、現時点では困難であるが、病変の深達度および断端の情報が得られることから、第一選択として strip biopsy を施行し、必要ならば LASER を追加する方法が望ましいと考えた。

2) 小児消化性潰瘍症例の検討

大沢 義弘・岩渕 真 (新潟大学)
小児外科
松原 要一・武藤 輝一 (同 第一外科)
桑原 春樹・吉住 昭 (県立吉田病院)
小児科

小児の消化性潰瘍は近年社会環境の複雑化や、積極的な内視鏡検査により増加している。

一方、最近の新たな抗潰瘍剤の開発により治療法の变化も推測される。そこでこの点につき、症例の年次的推移を分析し検討した。

対象は、手術例22例、非手術例58例の合計80例(男児62例)であり、十二指腸潰瘍が60例を占めた。特に手術例は全例10才以上の十二指腸潰瘍であった。しかも、年次的に手術例は減少傾向にあり、手術適応では難治性と出血によるものが減少し、穿孔と狭窄によるものは変化なかった。